

全  
一  
件  
一  
冊

馬士  
子  
姓

本間文庫  
文庫 14  
A 21













此の如く羊飼の杖を甲上にて置て、後で  
けるは、或何の別傳の事か、よふこと、猶木入の  
まゝに、てんことを致しませぬ。この中にて、  
三人のものを、正直の雇人と、おとよや、  
命を忠義に守つて行かぬ、ありませぬ。一  
上にも主人の、たゞの、先づ、一  
たに、ませぬ。

これ一般の至當の事にてあり、それと唯使身、  
おあつた、却て、  
若し、それ他の人、  
怒の、  
教の、  
何

と先づ頭のまはり、  
二二

二二、  
るた、  
おれと、  
を、  
が、  
の、

これ、  
は、  
に、  
る、



ステューデンツよりキレハルと云思心サリテ此處に於て。何  
もホナシマシ。神様ト書ハクは日ノトクニホナシガハル  
キキヨリ。憐る所ホキ。年若キ男ヲモテテノリ。此キ  
ハキエマテアリ。礼ホナリ。  
此キテハ外ノ猶ほ。改羅巴ヨリ来ル高人等ヲ捲キテ  
リ。彼等ト身若キ男ノ為メ。テノ死ヲ氣遣ハナリ。世  
亦自分等ノ向ても氣遣ハナリ。或モ若し上官ガ権力ヲ  
彼等ノ中ノ一人ノ漁せんカ。ホナシ人達オケル何事ヲ以テ  
是レノ序ヲブスホナシ。  
事件ノ証人アリ又オ耳其人ノ怒ノ火花ヲ放テテ眼ヲ見  
ホナシ人トモ。ハヤオ耳其人ガテホ赤衣ノ吏人ト相  
シテ。直チト大膽ホナル人ヲシテ首尾ノ事ヲ異ホセ

め。此ガ如ク一ラホナシガ氣遣ハナリ。  
ホナシトホナシト殊別トホナシ。  
暫ク黙然トシ。後オ耳其人モ言ハリ。ギマウノホナシ  
明日近デ考思ノ時ヲヤルカ。ホナシガ又ホナシトホナシ  
ホナシホナシト見ホナシ。ホナシホナシトホナシノホナシ  
書ト法んで置カレトホナシ。  
斯ク言ヒ。オ耳其人モホナシトホナシトホナシトホナシト  
新刊吏モ一行ノ最以ニ於テ一礼ヲ年若キ男トホナシト  
テホナシモホナシトホナシトホナシトホナシトホナシト  
目使ト一礼ホナシトホナシトホナシトホナシトホナシト  
ホナシトホナシトホナシトホナシトホナシトホナシト  
ホナシトホナシトホナシトホナシトホナシトホナシト  
ホナシトホナシトホナシトホナシトホナシトホナシト







夜、ル井テ、静に横臥して、その精進を祈り拜み、  
殿を以て慈母の膝に寝入り、宛重の如くして持  
けよとまを舞入るなり。

次の朝、彼を強壯に成せしめ、主の君  
を養育して、清澄なる心と喜ばしき胃袋を待つが如  
し、静かよ、又、善良なる氣を以て、殿の方へ行  
く時、土耳其人を街道より、ル井テを朝知、食を  
くれんと云ふ、<sup>見付</sup>子て出でて来りしなり。兵度も、  
つゝ赤衣を行列の後、続き居て、ル井テ一礼し、  
し時を昨日の如く赤衣の様に打殺ししなり。何所  
に逃れし土耳其人の来れる所、土人とみよ、逃  
げし土耳其人の容貌こそ善か、めことを約束し、  
居る様あれば、

リ。ル井テの靈の如く、彼を立ち止まれり。いとも  
美小に判じを見つめり、あして彼を言ひ、「ギマ  
ンて見こめ。

平静に、ル井テ、彼れを眺めて、<sup>見付</sup>「何れに  
いません、唯昨日私が申した事、<sup>私</sup>私の主人の忠  
告を以て、今日も、<sup>私</sup>私に忠告を以て、今日も、  
日も、<sup>私</sup>私に忠告を以て、今日も、<sup>私</sup>私に忠告を以て、今日も、  
の守備で、<sup>私</sup>私に忠告を以て、今日も、<sup>私</sup>私に忠告を以て、今日も、  
お思いは、<sup>私</sup>私に忠告を以て、今日も、<sup>私</sup>私に忠告を以て、今日も、  
が主の忠告を以て、今日も、<sup>私</sup>私に忠告を以て、今日も、  
か、<sup>私</sup>私に忠告を以て、今日も、<sup>私</sup>私に忠告を以て、今日も、  
そと、<sup>私</sup>私に忠告を以て、今日も、<sup>私</sup>私に忠告を以て、今日も、  
置き、<sup>私</sup>私に忠告を以て、今日も、<sup>私</sup>私に忠告を以て、今日も、







久瀨批評と云く申て茲に文學上の助言を申して賛成を仰ぐ 亦  
整評とは疵の如きものと言ふ予此の譯文を讀むに流暢と四活  
と出まぬる全体訳文とし云は其意味譯者も分明り兼ねるもの多し  
ふふ譯者の其禍中陥るる予其此學を精しき又だ精しきまねるを  
整評と云く整評と云く而り少々原意と乖ふ所あり知可らざれと予既  
に且原文を暗せば此は譯者も取ら幸福といふ一然る予と譯者  
と文學界の境上と於て見参するものれば茲に疵の如き助言を言けし  
流暢の文は流れて遂に落しと云く易く四活と五單句多くは激昂の  
勢氣を欠損す故に危急の場所(ルイセルが首斬後を認めし時)の如き  
に於ては言長短氣緩急其活字を企てざる可らず又「一は鍊字術之苦  
心し玉つ」苦々男といふは「壯」といふ 「目使ひと」禮はといふは「顧盼  
と肯道」といふ雅言の如し仔細漢字が嫌ひされは其れ迄でさ



